

平成二十八年十二月投句

冬木立大切な人ふいに消え

かの人の呼ぶ虎落笛風の音

人去りしを知りたくなくて着ぶくれて

勝利

カーテンにしがみて潜む冬の蜂

真理子

皿倉山（さらくら）の上に見つけし冬の星

犬匂ひ嗅ぎて丸める古毛布

濁点の如くビーナズ冬の月

ぽっかりと空席のまま年暮るる

橋くぐり飛びし一羽や尉鷗

節子

係留の鵜舟冬日の筑後川

由紀子

注連作募集の市政だよりかな

弟に絵本読む児へ毛布掛く

無人駅となり久しく冬ざれて

小春日や少しの恙良しとして

光子

約束の時に間のあり冬ぬくし